

大学図書館におけるデータベースの利用

0714378 蕪城 有未子

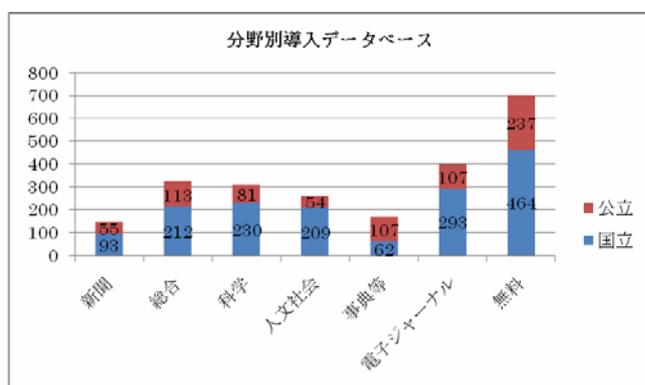
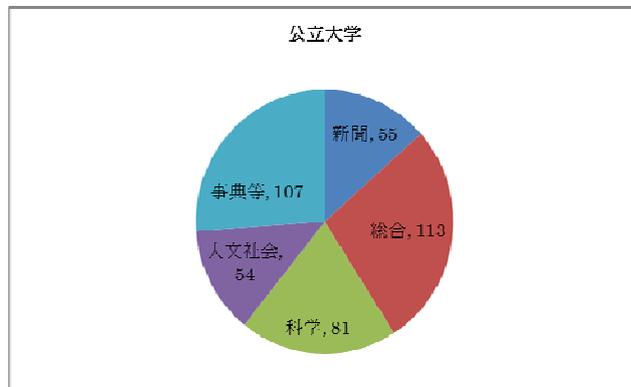
1. データベース

最新図書館用語大辞典では、データベースとは「データを大量に収集・分析・加工・蓄積・整理して、コンピュータが処理しやすいかたちにしたファイル。供給形態によってオンラインと CD-ROM、DVD などオフラインがある。図書館では情報の集合体をさす検索型データベースを意味することが多い。」としている。

2. 調査結果

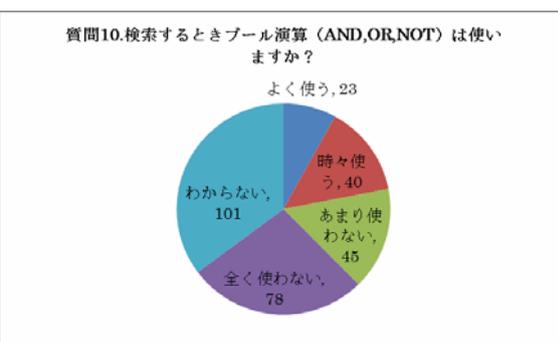
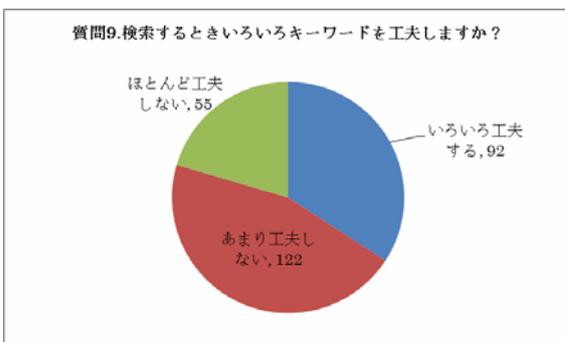
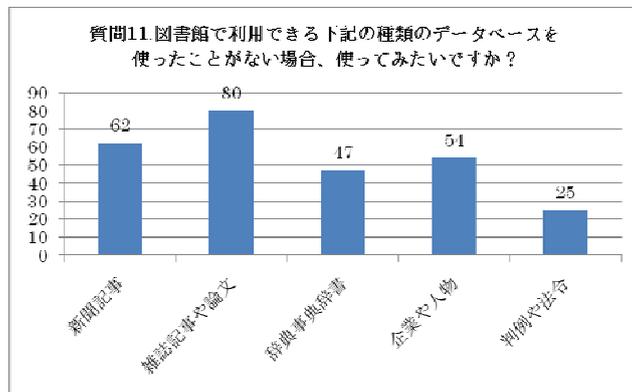
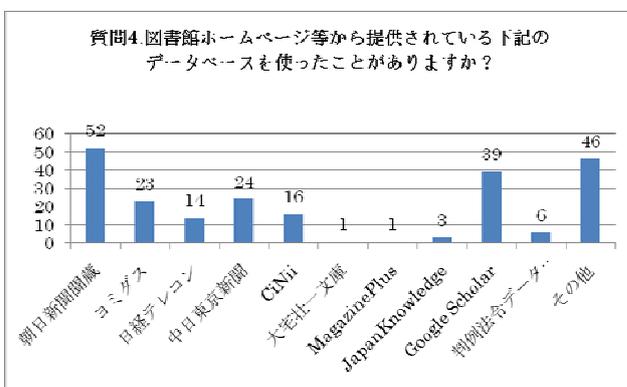
2.1 データベース導入状況調査

ホームページ上で導入しているデータベースの公開している国立大学 89 校、公立大学 58 校を対象とした。結果として科学分野においては国立大学と公立大学では導入傾向の違いが多く、また構成分野においては、公立大学は人文社会分野のデータベースの割合は低く、文系の大学におけるデータベースの導入が進んでいない、または文系のデータベースの導入が進んでいないことなどが考えられる。



2.2 愛知大学学生の利用状況調査

愛知大学豊橋校舎に在籍する学生 321 名に対しアンケート調査を行った。愛知大学がホームページで提供しているデータベースは新聞データベース、雑誌記事・論文のデータベース、事典等のデータベース、企業や人物関連のデータベース、判例や法令関連のデータベース、その他である。結果として愛知大学学生のデータベースの認知度は非常に低かったが、しかしその中でも比較的高い傾向にあったのは新聞関係のデータベースであった。また今後利用してみたいデータベースの分野としては「雑誌記事や論文」が最も高く、次いで「新聞記事」であった。「企業や人物」といった回答も多かった。また学生の情報検索行動に関しては、「検索時のキーワードの工夫」や検索の際のブール演算の利用の低さ、かつインターネットへの依存の割合が高いなどから「学部生は情報リテラシーが十分に発達しておらず検索スキルが身に付いていない」と考えられる。



3. 考察

学生のデータベース認知度はいまだそれほど高くないことが明らかとなり、図書館側からの広報活動に課題がみられた。またデータベース利用教育においては国立大学と公立大学、私立大学で実施回数の差に開きがあり、また特に公立大学では国立にくらべ、人文社会系のデータベースの導入が進んでいなかった。